リレー連載

「いじめ」に思う

―「いじめ」に思う　ドーナッツと合唱コンクール　1／3―

吉成　タダシ（ストーリーライター）

空っぽになった学級

九月、二学期がスタートしてしばらくたったころ、三年A組には、思っていることがあるのに、それを言わない、そんなよそよそしい雰囲気が漂っていました。しかしそれは、文化祭の合唱コンクールを二日後にひかえ、クラスがまとまろうとしているがゆえに感じられる雰囲気なのかもしれないとも思えました。

しかし、委員長のアツミと副委員長のアキコは、そんな雰囲気を察知し、相談したうえで、苦渋の選択として敢えてクラス全員に提案し、急遽学活の時間をとることを私に求めてきました。そして、日ごろ互いのことで思っていることを出すように求めたのです。

ノブオの言動に対する不満が出されました。それは、「給食のとき、男子グループがノブオを入れようとせず、一人で食べていた」とか、「ノブオが自分にだけキレた言い方をする」というものでした。

それに対し、ある男子は、「『入れ』と言ったが、ノブオから来ない」と主張します。そんなことを言われても、曖昧な返答しかできないノブオに、さらに不満の声が挙がっていきました。数人のやりとりは収拾のつかない状況をうみだし、挙げ句の果てには司会をしていた委員長のアツミに対してまで、「うっさい！殺すぞ！」という罵声すら飛び出たのです。直後、アツミはいたたまれず席を立ち、教室を飛び出してしまいました。すぐに追いかける数名。どうしていいのかわからないクラスメイトに、「探しに行こう！」と声をかける者たち。教室はとうとう空っぽになってしまいました。

踏ん張ろうとする子どもたち

しばらくして一人、二人と帰ってきた生徒から聞かされた言葉は、「アツミちゃん、合唱コンクール終わるまで、もう学校来ないって」。アツミ以外の全員がぞろぞろと帰ってきたところで、副委員長のアキコが切り出しました。

「先生、どうしたらいいんですか？」「うん、どうしたらいいと思う？」と全体に聞き返した私の言葉に、誰も反応できませんでした。「…誰も、何もないの？」と一番の仲良しであるアキコの強い問いかけにも、やはり何も反応できない生徒たち。沈黙の後、私が言いました。

「もういいよ、アキコ。もうこのままでいいよ。終わりにして、帰りの学活の準備しよう」ざわざわと動き出す生徒たちの中で、アキコは泣きながら一人教室を飛び出していったのでした。

帰りの学活が始まろうとする雰囲気の中で、今度はミサトから声が挙がりました。「先生、ちょっと時間もらってもいいですか？」「…いいよ」

ミサトとマユがアツミとアキコの二人を除く全員に問いかけました。

「アツミちゃんが飛び出した原因はいろいろあるだろうけど、ヨウヘイくんがアツミちゃんに『殺すぞ！』って言ったのは、やっぱり言い過ぎだと思う。けど、ヨウヘイくんもそれはダメだって思ってるんだよね？」「…うん」「アツミちゃんが合唱コンクール終わるまで学校来ないって言ってるんだけど、やっぱりみんなで歌わないと意味がないと思うの。だから、まずは悪いと思うのなら、ヨウヘイくんがちゃんと謝りに行って、それでもアツミちゃんが来ないのだったら、その時は、合唱コンクール棄権した方がいいと思うの。みんな、どう思う？」

うなずくクラスメイトたち。話し合いの最中に、目をはらして教室に帰ってきたアキコが、状況を見ながら今回の問題点について、あらためて提起を始めました。緊迫したムードが続きながらも、何とか少しずつ、踏ん張りを見せはじめた三年A組でした。

それぞれが揺れる思いの中で

とはいえ、放課後に行われたノブオが参加している文化祭の劇担当の先生からは、「ノブオくん、今日何かおかしかったよ」との報告が入ってきました。アツミのお父さんからは、「何かあったのですか？帰ってきたとたんに、明日から学校に行かないと言ってるんですけど…」という電話もかかってきました。そしてアツミからも、携帯にメールが入ってきました。何度かやりとりをしたアツミからのメールには、自分を責める内容や、委員長としてどういう行動をとればいいのか分からないといった苦悩、そして理想の学校像についての思いが、切々とつづられていました。

「このまま本当に棄権となってしまうのか？」という掛け値なしの不安と、「いや、大丈夫だろう…」と強がる気持ちが複雑に交錯する中、翌日はやってきました。合唱コンクールの前日です。朝、教室には、いくつもの空席がありました。それが、全員に突きつけられた厳しい現実でした。取り返しのつかない、切迫した状況が、そこにありました。朝に提出された生徒たちの生活ノートには、前日に繰り広げられたドラマの当事者としての思いが、率直につづられていました。

「今日のことは、すんごい頭の中が重いというか、何か…。でも、何でも思ったことを言えるクラスにしたいよね。クラスの目標は、『和』なのにね。人の悪口は言わない。もし言われたり、されたりしたことが嫌なら、その場できちんと相手に言う。その言われた側も『ムカツク』とか言わない、広い心を持つ。そんなことを全員が守れたらなーって思った。人間て『バクダン』そのものだよね。ちょっと操作を間違ったら、それで泣いてしまったり、取り乱してしまったり…。いろんな形で『バクハツ』するもんね…」ノートはさらに続きました。　（つづく）

3・11東日本大震災を契機に綴られた青春小説
吉成タダシ著『P・Mペットボトルマジック』
文芸社より絶賛発売中

イラスト　中島　亜唯